

# 大和名所図会の万葉歌

## —万葉地理研究前史として—

乾 善彦

### 一、歌枕類聚から名所図会へ

音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも（巻7・1103）

うわさにだけは聞いているがまだ見たことのない土地への憧れは、万葉時代にあっても同じで、そこへ行くこと、実際にそこを見ることを羨望し、そこを訪れた感動をこう歌う。やがてそれは、歌枕という形で歌の世界にひとつの「歌ことば」群を形成する。『袖中抄』など歌学書に見る古代の地名研究は、歌作の一助としての歌枕の考証が大きな部分を占めていた。近代の地名研究は、歌に読まれた地名の場所を比定することによって、歌の解釈の一助とするもので、歌枕の類聚とは質的な大きな差がある。しかしながら、地名研究が歌の理解とともに形成されてきたことは、歌枕研究においても変りはない。当然、そこにはさまざまな要素が交じり合う。

初期の名所類聚もまた歌を詠むための営為であった。歌を詠むための歌の類聚は、万葉集においては『類聚古集』『古葉略類聚抄』がそうであり、また、中世には『類聚万葉』がある。和歌世界にあっては、『古今六帖』のようなものが平安中期に和歌の類書として成立し、また、中世の『夫木和歌抄』はその代表的なものであるが、その中には、当然、歌枕のひとつとして、多くの名所歌が含まれることになる。これらの歌集編纂の目的が歌作のためであることは、部類分けが中国の類書の影響によることからもうかがえる。その萌芽は、万葉集中の部類分けされた詠物歌群等にすでにみとめられる。

膨大な地名を集めたものに『歌枕名寄』があり、また、中世から近世にかけて『類字名所和歌集』『松葉和歌集』などの名所和歌の類聚が盛んになる。近世期になると、それらの出版とともに、地名への関心は広がってゆく。

万葉集の地名を集めた早いものに、下河辺長流の『万葉集名寄』<sup>(1)</sup>があるが、これも歌作のための類聚であったと思われる。ただ、長流の場合、万葉集の注釈という観点はあったかもしれない。その点では、契沖の地名研究も、万葉集の注釈作業から出発しており、歌作のためという部分はぬぐいきれない。しかし、契沖のそれは仮名遣い研究に結びつく点、それまでの歌枕研究とは異質である。それまでの歌枕への関心からは異質であるという点で、万葉集の地名に関しては、長流、契沖あたりから万葉集研究の中の地名研究というものが出発したと言えるのではなかろうか。その点で、両者は近代の万葉地名研究の魁となるものといえよう。もちろん、それまでの万葉集研究が、基本的には歌作のためのものであったことを勘案するならば、歌枕研究によく利用される『詞林採葉抄』なども、地名（あるいは歌枕）の類聚という点では、その萌芽的なものといえるのではあるが。

以上の歌書とは別に、近世期盛んに編まれた、各地の名所図会をはじめとする地誌類も、また、歌枕の引用ならびに考証を含む。だが、そこには、地誌には地誌の論理があるとしなければならないだろう。旅というもののひろがりあるいは変質が名所図会や名所案内を要請したものであろうが、その出版の経緯について、ここには明らかにしえない。ただ、その内容についていうならば、そこに示された地名（名所）は、歌を含むとは限らない、まさに名所案内なのである。歌枕は多くの名所案内の

中の部分に過ぎない。しかしながら、そこに引用されるものの中に『詞林採葉抄』『夫木和歌抄』があることは、やはり歌枕も重要な一部であるということになる。歌枕の側からは、それはそれで歌枕のひとつのあり方として確かな位置をしめているのである。とするならば、歌枕がどのように地誌に組み込まれているかは、歌枕研究と近代的な万葉地理研究の間であって、研究史的なひとつの課題として設定しうるのではあるまいか。万葉集地名研究の前身として、『大和名所図会』に収められた万葉集歌あるいは万葉集関係の記述に、注目するゆえんである。

## 二、『大和名所図会』の方法

『大和名所図会』は、『日本名所風俗図会 9 奈良の巻』（角川書店）の解説によると、著者は秋里籬島、序文に寛政三年の年記があり、六冊七巻。地誌であるがゆえに、まず、その地のありかを説明し、また、その地にまつわる話を諸書を引用しながら記述する。また、それにあわせて春朝斎竹原信繁画になる絵が示される。引用されるのは、『大和志』『倭路記』『春日古記』などといった、当地の記録、地誌の類であったり、『日本書紀』『続日本紀』などの史書、また『袖中抄』『詞林採葉抄』といった歌書であったり、その範囲はきわめて広く、多岐にわたる。たとえば、巻頭、「大和国」の考証について、引用するのは『日本書紀』『続日本紀』『拾芥抄』『延喜開題記』『釈日本紀』『善隣国宝記』『後漢書』（善隣国宝記の引用）『日本世紀』『日本釈名』『続日本後紀』『日本正統図』、「奈良」については、『日本紀』『袖中抄』『詞林採葉抄』といった具合である。奈良の説明の中で「おおによし奈良」の枕詞についてふれるところは、「なほ秘説あり。歌道によりて明らむべし。」と歌道に通じている記述があるが、ここで歌を引くことはない。

もちろん、多くの地名については、『歌枕名寄』などのように歌を引用する形で記述される。ただし、地名の考証が先に立つところが地誌としての記述の方法であり、歌枕の類聚とは異なるところである。たとえば、

若草山（三笠山の北にならびたる山なり。『延喜記』に曰く「ここを皆人つづらを山といふは、九折〈つづらをり〉といふことにや」）

『夫木』

今のなほ妻やこもれる春日野の若草山に鶯ぞなく 中務親王

『歌枕』

春日野の若草山にたつ雉子〈きぎす〉今朝の羽音に目をさましつ 好忠

といった具合である（（ ）は小字割註、〈 〉はふりがな）。ここでは、歌枕の類聚書が引用されているが、通常の項目では、万葉集や古今集といった歌集名がならぶことになる。たとえば、万葉集を引用する場合も、

宣寸川（また吉城川、宣木川とも書けり。水源水屋峯より野田を経て東大寺をめぐり、法蓮に至つて佐保川に入る）

『万葉』

わぎも子に衣借香の宣木川よしもあらぬかいもが目を見ん

のように、实地踏査に基づいた川の説明が先ず付される。

引用歌集は万葉集のほか、古今集、後撰集などの勅撰集が多いが、新撰六帖、拾玉集、堀川百首などといった名前も見える。これが、すべてを原点から引用したことはまず考えられず、粉本があると思われるが、いまは特定できない。万葉集歌の引用に関しては、たとえば、「毛無岡〈ならしのをか〉」の引用、巻8・1506の作者を大伴像見とするのは、拾遺集によるものであろうし、「柿本寺人丸塚」

の引用歌巻10・2220の作者を人丸とするのは新古今集によるものであろう。もちろん、勅撰集から直接引用したというのではない。勅撰集の歌枕を類聚した『類字名所和歌集』のようなものが考える。歌の配列も、『夫木和歌抄』や『歌枕名寄』と一致するものもあるにはあるが、別表に示したように、必ずしも一致するわけではない。本文についても詳細は省略するが、異同の様相は複雑であり、ひとつの文献に定めがたいのが現状である。また、「羽買山〈はかひのやま〉」や「因可乃池〈よるかのいけ〉」「佐保川〈さほがは〉」「磐瀬森〈いはせのもり〉」など当然万葉歌が引かれてもよいところに万葉歌が引かれないものも相当数存在する。これらを含めて、本書の構成と成り立ちを考えていかなければならないが、今はその準備がない。

表1に万葉集歌の引用と、万葉集に関する注記とをあげた。しばらく、この表に基づいて考察をすすめよう。

【表1】

『大和名所図会』所引万葉集、万葉注記一覧						
頁	巻	項目	引用歌	作者	万葉集	先行歌集
011上	1	平城の皇城	あをによしならの都は咲く花のほふがごとくいまさかなり		③328	名寄
016下	1	三笠山	大君の三笠の山を帯にせる細谷川の音のさやけさ	人丸	⑦1102	夫木・名寄
018下	1	借香山	かりかねの声きくなべにあすよりはかりかの山はもみちそめけん『歌枕』 『万葉集』には備香能山(かすかの)とかけり		⑩2195	名寄
022下	1	東大寺盧舎那仏	すべらぎの御代さかえんとあづまなる陸奥山にこがね花咲く	家持	⑱4097	夫木・名寄
028上	1	宣寸川	わぎも子に衣借香の宣木川よしもあらぬかいもが目を見ん		⑫3011	夫木・名寄
036上	2	奈良坂般若路	青丹吉ならのおほぢはゆきよけどこの山道はゆきあはしけり	宅守	⑮3728	夫木・名寄
054下	2	柿本寺人丸塚	さをしかの妻こふ山の岡べなるわさ田はからし霜はおくとも	人丸	⑩2220	
063下	3	植槻八幡宮	『万葉集』に見えたり		⑬3324	
066上	3	勝間田池	かつまたの池は我しる蓮なししかいふ君がひげなきがごとし		⑯3835	夫木・名寄
077下	3	毛無岡	古郷のならしの岡の時鳥ことづてやりきいかにつげきや『万葉拾遺』	大伴像見	⑧1506	夫木・名寄
080下	3	竜田山	大伴のみつのとまりに舟は出て竜田の山はいつかこえいかん		⑮3722	夫木・名寄
092下	4	長屋原	和銅三年二月、藤原宮より寧楽宮にうつりたまふの時、長屋原にして古郷をかへり見たまひて 飛ぶ鳥の明日香の里をおきていなば君のあたりは見えずもあらん	太上天皇	①78	夫木・名寄
092下	4	衾道	衾道を引手の山に妹を置きて山径行けば生跡もなし		②212	夫木・名寄
101上	4	神岳山	三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなんかくさふべしや 神山三垣山神辺山、みな同山なり、いづれも『万葉集』に見えたり		①18	夫木・名寄
101上	4	神岳山	三諸つつ三輪山見ればこもり江の初瀬の檜原おもほゆるかも		⑦1095	名寄
101上	4	三輪山	味酒の三輪の祝の山てらす秋の紅葉のちらまくをしも	長屋王	⑧1517	夫木・名寄

頁	卷	項目	引用歌	作者	万葉集	先行歌集
103下	4	三輪崎	くるしくも降り来る雨か神之崎狭野の わたりに家もあらなくに		③265	夫木・名寄
103上	4	弓月嶽	足引の山河の瀬のなるなべに弓月嵩に 雲立ちわたる	人丸	⑦1088	
103上	4	檜原	巻向の檜原にたてる春霞くれし思ひは なつみけめやも	人丸	⑩1813	名寄
105下	4	海柘榴市	海柘榴市の八十衢にたちならしむすび し紐をとかまくをしも		⑫2951	名寄
105下	4	海柘榴市	紫ははひさすものを椿市のやそのちま たにあへる子やたれ		⑫3101	名寄
105下	4	磯城島金刺宮	志貴島の倭国はことたまのたすくる国 ぞまさくあれよし		⑬3254	
107下	4	泊瀬山	君が代は大はつせ路の百枝槻百枝なが らもさかえますかな			夫木・名寄
107下	4	泊瀬山	隠口の泊瀬をとめが手にまける玉はみ だれてありといはしやも	山前王	③424	夫木・名寄
107下	4	泊瀬山	隠口の泊瀬の山の山ぎはにいぎよふ雲 は妹にかもあらん	人丸	③428	夫木・名寄
107下	4	猪飼山	吾門之浅茅色就吉魚張能浪柴乃野之黄 葉散良新		⑩2190	夫木・名寄
107下	4	泊瀬山	海小船泊瀬の山にふる雪の消えがたく こひし君がおとぞする		⑩2347	夫木・名寄
107下	4	泊瀬山	隠口の豊泊瀬道はとこなめのかしこき 道はこふらくはゆめ		⑪2511	夫木・名寄
107下	4	泊瀬山	隠来の泊瀬を国につまあれど石はふめ どもなほぞきにける		⑬3311	名寄
107下	4	泊瀬山	隠口の長谷小国に夜延為て我が天皇寸 よ奥床に		⑬3312	
107下	4	泊瀬山	事し有らば小初瀬山の岩木にもこもら ば共に思ふな我がせな		⑯3806	名寄
110上	4	古河野辺二本杉	いにしへもかく聞きつつや忍びけんこ の古河の清きせの音を		⑦1111	
115上	4	笠山	雨零者将蓋跡念者笠乃山人尔莫令蓋霑 者漬跡裳	石上乙麻呂朝臣	③374	名寄
117下	4	宇陀野	宇陀の野の秋芽子しのぎ鳴く鹿も妻に こふらく我にはまさじ	丹比真人	⑧1609	夫木・名寄
123上	5	葛城山	青柳のかづらき山にたつ雲の立ちても ゐても妹をしぞ思ふ	人丸	⑪2453	夫木・名寄
131上	5	巨勢野	巨勢山のつらつら椿つらつらに見つ おもふな許湍の春野を	坂門人足	①54	夫木・名寄
135上	5	角田川	白妙に匂ふ信土の山川に我が馬難む家 恋ふらしも		⑦1192	夫木・名寄
136上	5	内大野	玉きはる内の大野に馬なべてあさふま すらんその草ふか野		①4	夫木・名寄
137上	5	小墾田宮	『万葉集』は坂田橋と詠めり			
142下	5	雷丘	天皇、雷丘に御遊の時によめるうた すべらぎは神にしませば天雲の雷のう へにいほりするかも	柿本人麿	③235	夫木・名寄
142下	5	七瀬淀	明日香川七瀬の淀に住む鳥も心あれば こそ波たたざらめ		⑦1366	名寄
143下	5	荒墳	天皇、藤原夫人に賜はりし御歌 我が 里に大雪ふれり大原のふりにし里にふ らまくはのち		②103	夫木・名寄

頁	卷	項目	引用歌	作者	万葉集	先行歌集
143下	5	八釣宮	矢釣山木立も見えずちりまがふ雪もは だらにまひてたのしも		③262	夫木・名寄
143下	5	藤原	藤原のふりにし里の秋芽子は咲きてち りにき君まちかねて		⑩2289	夫木・名寄
144下	5	藤原宮御井	八隅知し我が大君の高照らす日のわか みこ麓妙の藤井が原に大御門はじめた まひて埴安の堤のうへにありたし見 したまへれば日本の青香具山は日の経 の大御門に春の山路しみさびたてり 火のこの美豆山は日の緯の大御門に弥 豆山と山さびいます耳高の青菅山は背 友の大御門によろしなへ神さびたてり 名くはし吉野の山は影友の大御門に雲 居にぞとほくありける高知や天の御蔭 天知や日の御影の水こそは常にあらめ 御井の清水		①52	夫木・名寄
145下	5	南淵山	御食向ふ南淵山の岩ねには落浪たれか けづりのこせる	人丸	⑨1709	夫木・名寄
145下	5	南淵山	真十鏡南淵山はけふもかも白露おきて 黄葉ちるらん		⑩2206	夫木・名寄
146上	5	島宮	島宮勾の池の放鳥人目に恋ひて池にか づかず		②170	夫木・名寄
146上	5	島宮	島宮のまなの池なるはなち鳥ひとめに こひて池にくらはず		②170	夫木
146上	5	島宮	島の宮上の池なるはなち鳥荒びな行く ぞ君まさずとも	舎人	②172	名寄
146上	5	島宮	高光す吾が日の皇子のいましせば島の 御門はあれざらましを	舎人	②173	名寄
147上	5	逝回丘	明日香河逝回岳の秋萩はけふ降る雨に ちりかすぎなん	丹比真人	⑧1557	夫木・名寄
150上	5	竹取	むかし竹取翁といふものありけり。季 春の月に岡にのぼりてながめけるに、 九人の仙女に逢ひけり。翁 死なばこそあひ見ずあらめ生きてあ らば白髪子等におひざらめやも またをとめ等のよめる歌九首あり 委しくは『万葉集』に見えたり		⑩3791	
154上	5	敵火山	思ひあまりいともすべなき玉手次雲飛 山にわれしめむすぶ		⑦1335	夫木・名寄
154上	5	娘子塚	むかしこの所に娘子あり。容顔美豔に してほとりの人道路に顧て賞す。名を 桜児といふ。また二人の壮士ありてこ れを娶らんと互ひに誂み死を貪つて相 敵す。娘子こころやすからず歎歎とい ふやう、古より今に至るまで一女二門 に適ふ事を聞かざるなり。二士の意和 平がたし。妾が身死して相害を永く息 めんとして、林中に入つて樹に懸かり縊 れて死す。 『万葉集』小序に見えたり		⑩3786	
155上	5	蘇我河原	真菅よし宗我の川原に鳴く衛まなしわ がせこ吾こふらくは		⑫3087	夫木・名寄
157上	6	多武峰	うち手折り多武の山霧しげきかも細川 の瀬に波さわぎける	舎人皇子	⑨1704	名寄
161下	6	倉梯山	倉橋の山をたかみか夜こもりに出でく る月の片待ち難き		⑨1763	

頁	卷	項目	引用歌	作者	万葉集	先行歌集
163上	6	阿倍	吾妹子に相はで久しも馬下の阿部橘の 蘿の生すまで		⑪2750	
165下	6		いにしへの事はしらぬを我みても久し くなりぬ天のかぐ山	読人不知	⑦1096	
167上	6	耳梨池	むかし女ありけり。名を鬘児となんい ひけり。をとこ三人して恋ひあらそふ からに、女せんすべをしらず。さて想 ふやう、我が身一つ消えなんは露より もかろし。三人の男の心和平げがたき は石のごとし。終にこの池にして身を ぞなげける。三人のをとこ、なげきに 堪えずしてよめる		⑩3788	
167上	6	耳梨池	無耳の池しうらめしわぎも子がきつつ かくればみづもかれなん		⑩3788	夫木・名寄
167上	6	耳梨池	足曳の山かづらの児けふゆくと我に告 げせば帰りこましを		⑩3789	
167上	6	耳梨池	足引の玉蘂の児けふごとにいづれの隈 を見つつきにけん		⑩3790	
168上	6	猛田原	うち渡す竹田の原に鳴く鶴のまなく時 なく吾が恋ふらくは		④760	夫木・名寄
171下	6	吉野山	三芳野の山下風の寒けくにはたや今宵 も我独りねん		①74	夫木・名寄
173下	6	水分山	神さぶるいはね己凝敷みよし野の水分 山を見るは悲しも		⑦1130	夫木・名寄
173下	6	六田淀	音に聞く目にはまだ見ぬ吉野川六田の 淀にけふ見つるかも		⑦1105	夫木・名寄
173下	6	桜渡	ふなはりのるかひの山にふす鹿の妻よ ぶ声を聞くがともしさ	良女	⑧1561	夫木・名寄
184上	6	袖振山	『万葉集』には石上とよめり		④501 ⑪2415 ③422	
186下	6	高城山	三芳野の高城の山に白雲はゆきはばかり てたなびきて見ゆ	釈道観	③353	名寄
189下	6	吉野皇居	よき人のよしとよく見てよしといひし 吉野よく見よよき人よ君	天武天皇 御製	①27	名寄
193下	6	吉魚張	吉魚張の夏身のうへの山を出でて西を さしける月の影みゆ	家持		夫木・名寄
193下	6	夏箕川	吉野なる夏実の川の河淀に鳴ぞ鳴くな る山陰にして	湯原王	③375	夫木・名寄
193下	6	御船山	滝のうへの三船山より秋津辺にきなく わたるは誰呼子鳥		⑨1713	夫木・名寄
193下	6	吉魚張	我が宿の浅茅色つく吉魚張の夏箕の上 に時雨ふるらし		⑩2207	夫木・名寄
193下	6	耳我嶺	三芳野の耳我嶺に時なくぞ雪はふりけ るひまなくぞ雨はふりける	清見原天 皇御製	①25	名寄
195上	6	清河原	くるしくも暮れ行く日かも吉野川清河 原を見れどあかなくに		⑨1721	名寄
195下	6	玉水滝宮古	東の滝御門にさもみえときのふもけふ も召す事もなし	舎人等	②184	
196上	6	安芸騎野	あきの野に宿る旅人うちなびきいもね こしやもいにしへおもふに		①46	名寄
196上	6	宇治間山	宇治間山朝風寒し旅にして衣かすべき 妹もあらなくに	長屋王	①75	夫木・名寄
197上	6	東野	東野の煙のたちし所にてかへり見すれ ば月かたぶきぬ		①48	夫木・名寄

(角川書店『日本名所風俗図会 9 奈良の巻』による。頁は同書の頁数、巻は『大和名所図会』の巻数。万葉集の欄に歌番号がないものは、該当する万葉歌が特定できないもの。先行歌集として、『夫木和歌抄』『歌枕名寄』に同歌が掲載されているかどうかを示した。)

まず、『万葉』と注されながら、現行万葉集に該当箇所が見当たらないものについてみておく。「泊瀬山」の項では、まず「初瀬村の上にあり。嶺めぐり、谷幽かにして山口翳蹊す。ゆゑに隠口くこもりく」の初瀬くはつせと呼ぶ」と注記した上で、「『八雲御抄』に云く「海士小舟泊瀬山といへり」と『八雲御抄』を引用し、枕詞「こもりく」をもつ万葉歌五首をあげ、さらに『詞林採葉抄』を引用して、枕詞「こもりく」の説をあげた上で「大泊瀬、小泊瀬ともあり」を引き出し、そのあとに万葉歌三首を配する。その第一首に「大泊瀬」の歌があげられている。この歌は、万葉集にはなく、『夫木抄』には作者を「俊頼朝臣」とし、『歌枕名寄』では作者注記がなく、つながりでは万葉集歌ととれる配列になっている。「吉魚張くふなはり」の二首のうちの家持歌も万葉集には見られないが、『夫木抄』『歌枕名寄』とも家持歌として掲載している。「大泊瀬」「吉魚張」の両首とも歌枕類聚歌集では確たる位置をしめた歌であったとおぼしい。

次に、引用歌が『夫木抄』『歌枕名寄』に見えないものを検討する。「柿本寺人丸塚」の「さをしかの」の歌は、歌枕としての引用ではなく、当地で連歌師宗長が詠んだ「秋は霜げにおくとも早田かな」の句に「宗範云ふ」として、この歌を本歌としてあげているものである。「植槻八幡宮」は巻13に「植槻が上」として見えるものであるが、歌枕としてはなじまない。「弓月嶽」は、当該歌を冒頭に『続後拾遺』家隆歌、『風雅』鎌倉右大臣歌、『拾遺愚草』定家歌をあげるが、『夫木抄』『歌枕名寄』とも

あなし河河波たちぬまきもくのゆつきがたけに雲井たつらし 人丸

かげろふのゆふさりくれば佐豆人のゆつきがたけにかすみたなびく 同

の二首をあげるのみである。「磯城島金刺宮」は歌枕としては不適當であり、「泊瀬山」の歌は歌として不完全である。「古河野辺二本杉」は、『夫木抄』では「ふる川 やまと すぎ」として「いかばかりふる川の辺にとしもへぬいつあひおひのふたもとのすぎ 正三位知家卿」を、『歌枕名寄』では「古川辺」として「はつせ川ふる川のべにふたもとある杉年をへて又もあひみん二本あるすぎ」の古今集旋頭歌をあげる。この万葉歌は「二本杉」の歌としては不適當である。巻16の詞書が三箇所「竹取」「娘子塚」「耳成池」にみえるが、詞書のみでは当然、歌枕類聚歌集にはなじまない。また、「耳成池」第二首第三首も「耳成」の地名を含まないので歌枕類聚歌集にはなじまない。「倉梯山」「阿倍」「天香久山」の三首は『古今六帖』にみえる。「玉水滝宮古」では「これも秋津の宮にや。『名寄歌枕』に見えたり」と注するが、『歌枕名寄』には見えない。ついで当該歌と『夫木抄』から「今ははや氷も解けぬ玉水の滝の宮古は春めきぬらん」をあげるが、『夫木抄』には「たきつみやこ」としてこの歌をあげ、万葉歌はあげない。この歌は島の宮で詠まれた舎人の歌であり、「東の滝の御門」としてとられるべきものである。

引用された本文には、『夫木抄』『歌枕名寄』あるいは『古今六帖』などと異文があり、また寛永版本の訓とも異同がある。それぞれに、典拠とした文献の確認が急がれるが、今はその用意がない。ただ、他文献と異なり寛永版本と一致する訓もいくつかあるようである。

最後に、万葉歌をあげるべき地名で万葉歌があげられていないいくつかを表2として指摘しておく。これらは、万葉集でも有名な地名であり、表記まで含めて万葉集との関係が強い地名であるが、万葉集を直接引くことはない。一部を除いておおむね勅撰集が冒頭におかれることからすると、勅撰集から歌枕を類聚した『類字名所和歌集』などが粉本となっている可能性がある。「飛鳥川」の末に「飛鳥

川の和歌、およそ二十一代集の中に八十五首あり」とあるのが参照されるが、今後の課題としておく。

【表2】

頁	地名	冒頭引用歌集	作者	万葉集
19下	高円山〈たかまとやま〉	新古今集	藤原基俊	②230 ⑥981
21下	羽買山〈はかひやま〉	新後拾遺	順徳院	⑩1827 ②210
35下	佐保川〈さほがは〉	古今集	忠岑	⑦1251 ④526
72上	因可乃池〈よるかのいけ〉	夫木抄	公朝	⑫3020
77下	磐瀬杜〈いはせのもり〉	後撰集	元方	⑧1466, 1470
99上	痛足山〈あなしやま〉	遠高歌合	基俊	⑫3126
131下	阿多大野〈あたのおほの〉	金葉集	大宰大貳長実	⑩2096
135上	真土山〈まつちやま〉	拾遺集	読人不知	④534 ①55
137下	軽池〈かるのいけ〉	玉葉集	紀皇女	③390
140下	真神原〈まかみのはら〉	澄月歌枕	良清	⑧1638 ⑬3268
141上	飛鳥川〈あすかがは〉	古今集	春道列樹	⑪2702 ⑩1878
142上	飛鳥里〈あすかのさと〉	続古今集	岡屋入道前撰 政太政大臣	①78
163上	磐余池〈いはれのいけ〉	続後拾遺集	二品法親王	③416
170下	妹背山〈いもせやま〉	後撰集	よみ人しらず	⑦1247
172下	吉野川〈よしのがは〉	古今集	貫之	②119 ⑩1868
187下	青根我峯〈あをねがみね〉	新撰集	頼政	⑦1120
193上	象山〈きさやま〉	詞花集	曾禰好忠	⑥924
193上	象小川〈きさのをがは〉	玉葉集	家持	③316, 332
195下	多芸津河内〈たぎつかはち〉	夫木抄	前中納言宰相	⑥921
197下	丹生川〈にふがは〉	草根集	—	②130 ⑦1173

(資料は表1に同じ。万葉集で多数の例があるものは二首に限った。)

以上見たように、『大和名所図会』においては、諸書に引用された中のひとつとしての万葉集の地名なのであり、万葉集の地名研究史の上からは特異なものであるが、万葉集の引用態度を含めて、近世における万葉集の受容のひとつのあり方を示したものと見える。すでに成立していた長流、契沖らの研究が、後世につながる万葉集そのものを対象とした地名の考察であるのとは、位相を異にするということになる。シンポジウムのテーマであった「万葉の旅」という観点からは、むしろこちらのほうが格好の案内書となるものとはいえるのであるが。

注

- 1 下河辺長流による『万葉集名寄』は、万葉集中の地名を抜き出し、国別に類聚したものである。刊記はないが跋文によって万治二年頃の成立と見られる。歌の傍らに注を書き入れるが、地名の考証ではなく歌の語句の注である。地名を国別に配した点は、歌枕類聚歌集に等しく、歌学の伝統にのったものであり、当時の古典注釈と歌学との関係を考える必要がある。その点では、契沖についても同じことがいえ、万葉集研究における両者の位置付けが見直される必要がある。この点については、西田正宏氏のご教示を得た。